宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校

探究学習

当事者意識を持ちながら深い問いを立て、課題に向き合う生徒を育成

変革のステップ

背景と課題

- 自分が関心のあることに基づき、生徒に研究テーマを設定させる探究学習を進めていたが、意欲が高まらない生徒がいた

実践内容

- **研究テーマの設定の視点を改善**　ＳＧＨ（＊1）指定時には、「社会問題の解決」の視点で設定させていた研究テーマを、G型（＊2）指定後には、「地域と協働した社会問題の解決」の視点で設定
- **生徒に何度も問いかけ、内面を揺さぶる**　研究テーマを設定した理由などを生徒に問いかけ、自分と研究テーマのかかわりを深く考えさせる
- **地域連携の推進**　地域のイベントに参加することなどを通じて、地域と協働で探究学習を進めることにより、当事者意識を育む

成果と展望

- 当事者意識を持ち、問題解決のために地域に積極的に働きかける生徒が増えた
- 今後は、生徒に自身の成長について実感を持たせるため、探究学習を通じて育成した資質・能力の評価方法を確立したい

開校時から探究学習に力を注ぎ、取り組みの質を高める

宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校は、九州山地の中央部に位置する自然豊かな五ヶ瀬町に、全国初の公立中高一貫教育校として１９９４年４月に開校した。１学年約40人の全寮制で、少人数教育を特徴とする同校では、開校時から「フォレストピア学習」と名づけた探究学習に力を注いできた。村山育志（やすし）教頭は、二十数年間にわたって試行錯誤してきたのが探究学習だったと振り返る。

「本校の探究学習は、３つの段階で進化してきました。各段階で一定の手応えを得ながらも、生徒の学びの質を高めたいという意識を教師が常に抱いていたからこそ、前進し続

PROFILE

1994年４月に全国初の公立中高一貫教育校として開校。99年度、現校種に変更。中高６年間を見通した独自のカリキュラムを編成している。全寮制で、１学年約40人の生徒に対して教師約６人を配置した少人数教育が特徴。

設立	1994（平成６）年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	１学年約40人
2019年度入試合格実績（現役のみ）	国公立大は、電気通信大、広島大、九州大、長崎大、宮崎大、鹿児島大、宮崎公立大などに22人が合格。私立大は、日本大、明治大、近畿大などに延べ13人が合格。
住所	〒882-1203 宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町大字三ヶ所9468-30
電話	0982-82-1255
Web site	http://gokase-h.com/

＊プロフィールは2020年３月時点のものです。

＊１　文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。　＊２　文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」。

けられたのだと思います」

開校時から2013年度までの第1期では、「個性の開発」を掲げ、地域の自然や文化の中から、生徒が自身の関心に基づいて設定した研究テーマを追究する形だった。第2期の2014年度からは、SGHの指定校として、社会問題の解決案を探究することに取り組ませた。そして第3期の現在は、19年度に文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）」（以下、G型）の指定を受け、地域と連携した探究学習を推進している。

「探究学習で求められているのは、地域や社会の問題に目を向け、当事者意識を持ってその解決に取り組む力の育成だと考えています。本校も、生徒が地域の中に飛び込み、より実践的に社会問題に向き合える取り組みを目指しています」（村山教頭）

教頭
村山育志 むらやま・やすし
教職歴26年。同校に赴任して1年目。「知的好奇心をくすぐり、他者とのつながりを楽しむ生徒を育てたい」

魅力づくり・発信プロジェクトリーダー
東口匡樹 ひがしぐち・まさき
教職歴19年。同校に赴任して11年目。「100年後の子どもたちがわくわくしながら学べるように、多様性のある教育を目指す」

研究調査部主任
上水陽一 かみみず・よういち
教職歴17年。同校に赴任して9年目。「共学共創の精神を持ち続け、『社会にインパクトを与えられる教師』を目指す」

教務部主任
牧野亮司 まきの・りょうじ
教職歴15年。同校に赴任して7年目。「すべての学びは問いから。『何をどのように問うのか』を常に生徒とともに追求し続けたい」

研究調査部副主任
鈴木圭介 すずき・けいすけ
教職歴11年。同校に赴任して2年目。「『他人事』を『自分事』にする。それが深い学びや協働につながると日々実感している」

宮崎県高千穂町役場財政課総合政策室
田﨑友教 たさき・ともので
「世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会」で地域活性化に取り組む。地域協働学習支援委員として、同校を支援。

研究の意義を感じられるよう、社会問題解決型の探究学習に

同校の探究学習の進化を具体的に見ていこう。「個性の開発」を掲げた第1期から「社会問題の解決」に重きを置いた第2期への移行は、生徒に研究目的を明確に持たせたいという思いから始まった。開校以来、同校が大事にしてきたのは、「恵まれた自然の中での体験」であり、教科学力に加えて、創造力や発想力といった資質・能力を育むべく、探究学習に力を入れてきた。しかし、例えば、「野鳥の観察」などに夢中で取り組む生徒がいる一方、「自分の好奇心を満たすためだけの研究でよいのか」と疑問を持つ生徒もいた。そこで、「個性の開発」という教育方針を見直し、研究テーマの対象を社会問題にすることにした。魅力づくり・発信プロジェクトリーダーの東口匡樹（まさき）先生はこう語る。

「当時は、地球温暖化や貧困問題など、いくつもの社会問題が表面化していました。自分の研究は、社会問題の解決に役立つという実感を生徒に持たせることで、探究学習に取り組む意欲をさらに高めようと考えました」

SGHの指定校になった14年度の第2期では、「フォレストピア学習」での研究テーマの設定方針を見直し、「グローバルフォレストピア学習（以下、GF学習）」を始めた。1・2年次は、地域での体験学習を通じて地域や日本社会に対する関心を高め、3年次には、グローバルな課題を知るとともに、探究学習の進め方を学ぶ。そして、4年次からは、社会問題の4領域（経済格差、環境、エネルギー、高齢化）から各生徒が1領域を選んで研究テーマを設定し、調査や考察を重ねて、5年次後半～6年次に、研究成果を日本語の論文や英語のサマリーにまとめ、発表するといったカリキュラムにした。

生徒に何度も問いかけ、揺さぶりをかけて考えさせる

研究対象を社会問題としたことで、テーマ設定に戸惑う生徒は少なくなり、研究の意義を感じたためか、生徒は活発に議論するようになった。探究学習への意欲が高まったように思えたが、ニュースなどで見聞きした内容を引用して発言しているに過ぎない生徒も少なからずいた。そこで、教師間で議論を重ね、生徒への問いかけを徹底して行うことにした。例えば、「高

齢化が進む五ヶ瀬町の改善」を研究テーマにした生徒に、「なぜ、そのテーマが大事だと思ったのか」「なぜ、そのテーマに関心があるのか」「町の人に話を聞いてみたのか」「話を聞いてどう感じたのか」など、何度も丁寧に問いかけた。

そのようにして生徒の内面に揺さぶりをかけることで、徐々にではあるが、地域の課題を自ら見いだし、ビジネスモデルの提案を行うといった生徒が現れ、学外のコンクールや発表会で高い評価を得る生徒が増えていった。教師間で、問いかけの工夫によって表れる生徒の成長などを共有し、多くの教師が「なぜ」を意識して問うことで、課題を自分事として捉えられる生徒も現れ始めた。そして次第に、推薦・AO入試での志望理由書の質が変わっていったと、教務部主任の牧野亮司先生は語る。

「以前は、自分の希望を伝えるだけの志望理由にとどまっていました。しかし今は、『社会問題を解決するために、多角的に問題を分析する力をつけたい。そのために、この学科で学びたい』と、社会問題と自己の関心を結びつけて、志望理由を書けるようになりました。そうした変化が、推薦・AO入試の合格者の増加という結果にもつながっています」

地域との深いかかわりが当事者意識につながる

同校の教師が探究学習の手応えを感じる一方で、学校から出された課題だから取り組んでいるという受け身の姿勢が感じられる生徒が少なからずいた。少子高齢化や人口減少、農林業を中心とした産業の停滞などが顕在化している「超課題先進地域」の五ヶ瀬町で学んでいるのに、ただ課題をこなし、器用に研究をまとめるだけで卒業してほしくない――そうした教師たちの思いが、探究学習を第3期へと進ませた。研究調査部主任の上水陽一先生はこう語る。

「生徒が本当に当事者意識を持っているのならば、提案や発表にとどまらず、自分のアイデアを実現させようと行動するはずです。しかし、そうした生徒は、なかなか現れませんでした。GF学習では、どんなに優れたアイデアでも、提案がゴールになっていました」

そこで、G型に指定された19年度、生徒が地域と協働しながら社会問題の解決に向けて行動できるよう、地域と連携した活動を増やした。

「地域の多様な人々とかかわる中で、『地域のこの問題を何とか解決したい』という当事者意識が醸成され、自発的に社会に参画するようになることを期待しました」（上水先生）

連携先は、「世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会」だ。同校がある五ヶ瀬町と周辺4町村は世界農業遺産に認定され、農業や林業、文化、行事などに関する様々なプログラムを行っている。学校はそれらに生徒が参加できるようにし、生徒の探究学習を支援してくれる地域人材の紹介を各自治体に依頼している。高千穂町職員で同協議会事務局の田﨑友教さんは、同校との連携の意義を次のように語る。

「地域の未来を担う子どもたちが、幼少期から地域の自然や文化に触れるとともに、課題にも目を向けることが大切だと考えています。そうした経験を積み重ねてこそ、大人になった時に当事者意識を持って地域の課題に取り組めるようになり、この地域を離れたとしても、故郷を忘れず、いずれ何らかの形で地域にかかわってくれるのだと思います。地域で活躍する人材の育成を目指す本協議会にとって、地域の学校との協働は重要です」

抽象的・普遍的な問いを深める力を育む

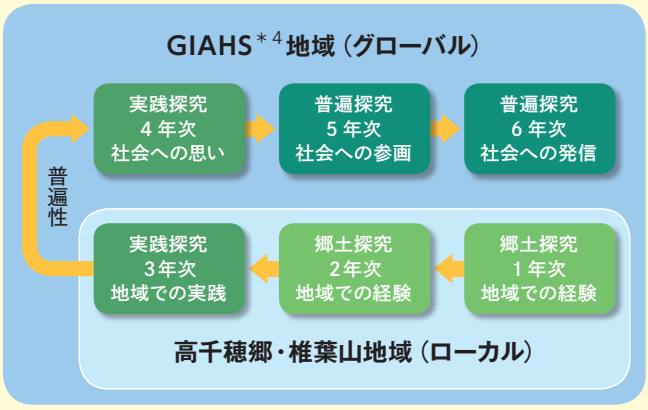
GF学習のカリキュラムも見直し、3年次に「マイプロジェクト」を導入した。生徒は、自分の「Will」（やりたいという思い）と、地域の「Needs」（社会的な必要性）の交点で研究テーマを設定し、研究に取り組む。例えば、お菓子作りが好きな生徒は、地元の特産物を活用した新しいお菓子を、地域の協力を得ながら開発する活動を行っている。

「研究テーマを4領域に限定していた時は、4年次に自分で選べるとは言っても、必ずしもそれが自分の関心のあるテーマとは限らなかったでしょう。今では、自分の提案を実行に移す生徒が次々と現れています。研究テーマは、生徒の『Will』から出発し、粘り強く『Needs』との交点を探ることが大事なのだ

と実感しています」（上水先生）

4年次には、国際バカロレアの「TOK（知の理論）」（＊3）を用いて、問題を多様な視点で捉えて問いを立てる力の育成を始めた。その力があれば、地域特有の研究テーマでも、普遍的に通用する問いを持ちながら課題に向き合える。例えば、3年次の「マイプロジェクト」で「五ヶ瀬町の過疎を食い止めるために、移住者を増やしたい」という課題に取り組む生徒が、「人はなぜ、定住するのか」「住むとは、どういうことか」などと、より普遍的なレベルまで自らの問いを深めて、課題に向き合うことを期待している。

図1　「グローバルフォレストピア学習」の流れ



＊学校資料を基に編集部が一部改編。

その上で、5・6年次の「普遍探究」では、4年次までの成果を踏まえて研究テーマを設定し、計画を立て、調査・分析・考察を重ねて、論文にまとめる。そして、その内容を地域に発信し、地域と問題意識を共有することを目指す（図1）。

問いを立てる力の育成は、試行錯誤の連続だと、研究調査部副主任の鈴木圭介先生は語る。

「1年間取り組んできて、これだという指導方法はまだ見つかっていません。ただ、担当教科の国語の授業で、日本人が明治時代以降、時間に縛られるようになったことについて述べられた評論を読んだ際、生徒から、『そもそも人類の歴史において、時間の概念はどのように変容してきたのか』という質問が出てきました。そのように、生徒の質問の質が変わったと感じる場面に出合う度に、問題の根本を捉える力が徐々に身についてきていることを感じています」

5つの資質・能力の到達目標を示し、自己評価をさせる

今後の課題は、探究学習を通じて育成した資質・能力の評価方法の確立だ。同校では、G型の指定を受けた際、目指す生徒像を、当事者意識を持って周囲の人やコミュニティーに働きかけながら、目の前の課題に取り組めることをイメージして、「野性味あふれる地球市民」とした。そして、そうした生徒が備える資質・能力として、「見る力」「問う力」「試みる力」「関連づける力」「つながる力」を設定。それら5つの資質・能力について、学年ごとの到達目標を示した「学習評価シート」（図2）を作成し、それを使って生徒に継続的に自己評価をさせ、自身の成長を実感させようとしている。

「本校が目指すのは、地域で協働できる人材の育成です。地球市民の一員として社会参画する以上、課題があればそれに取り組むという考え方で探究学習を推進しています。その過程で育まれる『見る力』や『問う力』などを適切に自己評価できるようにしたいと考えています」（上水先生）

図2　「学習評価シート　5年生」（抜粋）

見る力		チェック欄
知る	研究を進めていく上で、何をどう見ていくか、気づきを持つことができる。	
つなげる	研究を進めていく上で、本質的な事柄に目を向けることができる。	
応用する	研究で学んだことや発見したことを、多角的に捉えることができる。	

問う力		チェック欄
知る	研究において、多くの問いを立てることができる。	
つなげる	研究の中で生じた疑問点について、しっかりと調べていくことができる。	
応用する	研究を通じて、自らの問いに対して深く考え抜くことができる。	

試みる力		チェック欄
知る	失敗を恐れず、より深い学びに向かう行動が取れる。	
つなげる	自らの独創的なアイデアに基づいて、多様性のある実験・検証ができる。	
応用する	批判的思考力を生かして、自らの既成概念を打破し、新しい自分探しをすることができる。	

＊学校資料を基に編集部で作成。

＊3　Theory of Knowledge の略。国際バカロレア資格の取得プログラムの1つで、論理的思考力や、狭い見方にとらわれない批判的精神、コミュニケーション能力などを養うための授業。　＊4　Globally Important Agricultural Heritage Systems の略。世界重要農業遺産システムのこと。